

未来の子どもたちのために

女優／ライフスタイルコーディネーター
浜美枝 はま みえ



1943年東京生まれ。文化放送「浜美枝のいつかあなたと」に出演中。食アメニティー女性ネットワークの会長を務め、広く「農・食・環境」問題に関わっている。著書に『やさしくて正直な「食の作り手」たち』（家の光協会）、『浜美枝 凛として箱根暮らし』（主婦の友社）他多数。

箱根の芦ノ湖のそばに住み始めて三七年の月日が経ちました。この木の家に今、

住んでいるのも、骨董に魅せられたのも、農や食、美しい暮らしというテーマを見つけることができたのも、すべては、先人や木との出会いによるものだと、運命の不思議さを思わずにはいられません。

中学二年生の放課後、図書館で出会った一冊の本がすべてのはじまりでした。「無名の人を作る美」「用の美」という言葉が綴られた本に魅せられ、私はこれまで長い旅をしてきたような気がしています。

その本をお書きになったのは、民芸というものを見出し、世にその価値を問うた民芸の創始者・柳宗悦先生でした。女優としてデビューし、二〇歳になると、美の本質を追い求めて生きた柳宗悦先生のとあとを辿るように、古い美しい道具を求めて国内を歩き始めました。

けれど時代は、真逆でした。古いものなど見向きもされず、地方では何百年も人々の暮らしとともにあった古民家が

次々に壊され、新建材の家に建て替えられていました。

その旅の途中で、とある古い家の解体現場で、私は「助けて」という、心を切り裂かんばかりに悲しい木の悲鳴を聞いたような気がしたのです。矢も楯もたまたまなくなり、その場で、家を譲っていただきたいと持ち主にお願ひしてしまったのでした。その後、箱根のこの土地と巡り合い、さらに全国の古民家を見て歩き、結局一二軒の家を譲ってもらい、今の家を二〇年かけて作り直しました。

それから鳥のさえずりで目覚め、四季折々美しい姿を見せてくれる富士山やその姿を鏡のように山を映す芦ノ湖を眺め、夜には小さなダイヤをちりばめたような天の川に抱かれる暮らしがはじまりました。自然は人を甘やかさずばかりではありませんが、やはり自然の偉いなる力に、人の感性を磨き、心を癒してくれる何かがあると、日々、感じます。

このごろ、改めて私の民芸の師であつ

た池田三四郎さんの「この世の自然の造形物のどんなものにも、美があるんだ。そのあるがままの美しさを感じる心が大切なんだよ。ひたすら自然を見て学びなさい」という言葉もよく思い出します。

高度に経済が発展し、情報がものすごいスピードで世界中を駆けまわり、たったの一〇年で今ある仕事の職種が半分以上消えてしまうといわれるほど変化が激しい現代。時代はこれからますます進んでいくでしょう。

けれど人は生き物であることに変わりありません。ときには足をとめ、自分もまた自然の一部だということに立ち戻り、自らの五感を開放することもまた必要なのではないでしょうか。また日本の国土の約七割は森林であり、日本人は古来、森や山に抱かれて生きてきた民族でもあります。こうした時代だからこそ、未来の子どもたちのためにも荒れつつある森や山の再生のためにやるべきことがあるのではないかと思っています。



次号は、箱根寄木細工職人の露木清高さんをお願いいたします。

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧いただけます。